

教科研究における保育の授業の展開(三)

磯 部 景 子

人間のもっとも人間らしい世界

自由で気まままで、おとなのはいる余地のない場所である。しかし、子どもはの中で、子どもどうしのルールをつくり、行動をしている。それは、おとなからみれば遊んでいるとしか見えないが、その中には素朴なルールがある。そして、それに反したものは、仲間から追われてしまう。最も単純なくみではあるが、人間のもっとも人間らしい世界を、自然のうちにつくっている。そんな世界が子どもの世界であると思う。

(不明 K・O)

○
子どもの住む世界といっても、何か特別な世界ではなく、おとなの世界を、より簡素化した世界ではないかと思う。簡素化ということばの表現は適切ではないかもしれない。人間性の本質からくるなまなましさを感じるのである。

(不明)

言葉でいいあわせない世界

他の人に言葉で言うことができない。青空と風と緑につつまれた世界。おひさまの真下に。土と友だちになれる世界。(不明)

○

子どもたちの世界は言葉にだしていえる世界ではない。

(不明)

おとなにかまってもraitたい

おとなが全く入ってこないのではなく、時にはやさしく、時にはこわくてもいいから、干渉されていると感じない程度にかかわって欲しいと思っている世界。

(不明)

○

みるもの、きくものなど、すべてが興味の対象となる。

おとなが、自分のことについて関心をもってくれることを欲するけれど、あまりかまわれたくない。

親のもとにいれば安心していられる。(不明)

不安

自分の家から離れると恐れ(不安)を感じる。(不明)

自分がいつも通る道以外は悪い所やこわい所へ行く道である気がして、不安になる。(不明)

もろいもの

子どもの世界の中心は、子ども自身であり、そして、子どもはすべてのものが、自分中心にうごいていると思っていると思う。

しかし反面、自分をみている人(母親)がいないと、その世界は、もろくもくずれて消えてしまうような不安定なものだと思

う。(数学 N・N)

子どもの世界は、まだ、何も汚されていない。色彩で表現すれば、白にあたるといえると思う。子どもの世界は、環境によって、左右されてしまう非常にもろいもののように思える。

現実の子どもの世界

子どもの世界は、よく絵本の世界とか、夢の世界とかいわれる。確かに、子どもは現実とは違った想像の世界を持っていると思う。しかし、現実的にいえば家庭という世界、近隣の子どもとうしの世界、あるいは、学校という世界に住んでいる。

(幼児教育 K・O)

親の目の届く世界。おとなの保護する世界。できてしまった大きな中の小さな自由な世界。思考の世界だけで自由になれる世界。

子どもが自由な世界に住んでいるというのは、それは思考の世界においてであり、実生活においては数々の制約をうけるのである。(不明 H・O)

現在の子ども

自然に流れて行く水である。人工の川ではない。これが本来の姿であるが、現在においては、おとなの世界が入りこんでしまっている。だから時にちぐはぐな現象が起る。(数学 H・S)

○ 現代の子どもはかわいそうである。家に帰れば塾がまちかまえており、その上に、ピアノ、習字。はたして、今の子どもには、昔ほどの自由があるのだろうか。創造するということに欠けるのではないか。

(不明)

○ 現在の子どもは、本来、子どもがいるべき世界（この世界の定義は私にはできませんが）とおとなの乱れた世界との間におり、実に中途半端な、不安定な世界（または社会）にいます。と思います。

(史学 T・N)

自分自身の子ども時代をふりかえって

○ 今の子どもが現在どういうことを考え、どんな世界に住んでいるのか私には想像もつかない。これは近辺に子どもがまったくないためだと思う。ここでは、私が子ども時代になんかことを思っていたのかを書くことにする。

○ 子どもの頃は今とちがって、未来にのみ、道が開いているような感じがして、自分が何になるのか、何になったらどうするかということ、映画でも見るように想像していた。そして過去の出来ごとを全く忘れて、明るい面での空想ばかりしていたよう

に思う。自分の生活を物語化していたのだろう。

(数学 Y・T)

○ 私は子どもの頃、自分の見ていない所でも同じように、人が動き、生活しているということが信じられませんでした。遊びに来ていたいとこたちが、車に乗って帰っていくのを見送った時、私には、いとこたちが、そのまま消えていってしまうようにしか思えませんでした。彼らも家に着いて、彼らは、また、そこで生活を始めるのだということが、実感できませんでした。このように、子どもは、自分を中心にした自分と関わりのある世界の中だけで、生きていると思う。

(国語 K・H)

○ ムルヘンのような楽しい世界です。何でも本当となるような世界です。

○ 子どもの頃は、月が出てくると、自分が本当の中に入っているかと思えて、人前でうたをうたったりしたものです。頭にうたんでくるものにふしをつけただけなので、そのうたは、うたになっただけでいかなかったかもしれません。が、ほんとうに楽しいことでした。

(幼児教育 M・S)

私自身の経験をいえば、おとなの模倣をする、いわゆる、おとなのミニチュア版だったような気もするし、子ども独自のところもない夢の世界にいたような気もする。たしかに想像力は非常に大きなもので、身のまわりのものを何もかも、主人公にして、いろいろな話をつくっては、ひとりで遊んでいた。

○ (生物 K・M)

自分の経験から考えると、子どもの世界は私たちが考えている以上にきびしい世界だと思う。おとなには何でもないようなことでも、子どもにとっては大変なことだったり、いっしょうけんめいになったりした。私たちより真剣に生きているように思う。

○ (不明)

子どもの世界——いつまでも自分が脱出しきれないでいると思っているけれど、いつのまにかいられなくなっている。子どもの頃、土がえるをつかまえて、地面に部屋をつくり、ベッドに寝かせたりした。今となっては考えられない遊びがまだまだ他にもある。何にもなくても、ちゃんと遊ぶことができる。——おとなが気づかない世界。

○ (数学 Y・N)

子どもが住んでいる世界、少なくとも、彼らはそれを感じてはいないだろう。私に通ってきた限り、自ら意識することは少なかった。

しかし、確かにあるような気がする。

彼らは、すべての中で自分が中心である。

すべての事象が彼らの記憶や想像力の中で自分中心に動き回っている。

○ (美術 K・F)

子ども独自の、どちらかというところ、楽観的で明るい世界(宇宙)にいます。

すばらしい勢いで広がっていく世界だと思ふ。

私たちも、一度は経験したはずだけれど、ほとんど覚えがな

い。

ただひとつだけ思い出せることは、子ども時代、おとなが自分のことをばかにしていると憤った覚えがある。自分は、いっしょうけんめい考えてやっているのに。

子どもは自分では一人前だともい、そして、おとなと同じ世界にいますとも思っています。

(国語 T・G)

子どもの世界へのあこがれ

夢、不思議、童話、遊び、ファンタジック、おとぎ話、自由。

子どもの世界にある自由な感じと新鮮な感じを私はほしい。いつまでも、子どものようにいられたらどんなにうれしいか。

何にでも、すぐ夢中になれるなんて、とってもすてきなことだと思います。ひとつのことを考えたら、他のことは考えられないなんて、おとなの世界では、とおっていかないけれど、ほかのことがみえないくらいひとつのことに没頭し、真剣になるのは、とてもすばらしいことだと思います。

(不明 M・T)

わからないもの、忘れてしまったもの

私にとって、まったくわからない世界である。確かに、私は以前子どもだったのだから、わからないはずはないのに。知らないうちに成長してしまったという感じである。もし、周囲に子どもがいいたら、もう少しわかると思うのだが。今のところ、子どもという、とりとめがなくて、少し、恐れさえ感じてしまう。

(音楽 S・A)

子どもは、子どもどうしの、ある意味でほんとうにすばらしい

世界に住んでいるように思われます。私たちも、一度はその世界に住んでいたのですが、子どものころのことは断片的にしか思い出せなくなっているようです。子どもの世界のこと、自我にめざめ、自ら成長していく上で、忘れてしまう存在のように思えます。

(国語 Y・S)

(つづく)

(愛知教育大学)



○四月号に「新しく入園する子どもたちへ」を書いていただきました河野ゆり子先生の所属は、川村学園第一幼稚園の誤りでしたので、お詫びして訂正いたします。

○本誌への御意見、御感想は、左記宛にお願い致します。

〒112 東京都文京区大塚一の一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会「幼児の教育」編集部